

# 悪霊物語

江戸川乱歩

青空文庫



## 老人形師

小説家大江蘭堂は、人形師の仕事部屋のことを書く必要に迫られた。ブリタニカや、アメリカナや、大百科辞典をひいて見たが、そういう具体的なことはわからなかった。

蘭堂は、いつも服をつくらせている銀座の洋服屋に電話をかけた。そして、表の店に飾ってあるマネキン人形は、どこから仕入れているのかと訊ねた。

マネキン問屋の電話番号がわかったので、そこへ電話した。こちらは小説家の大江蘭堂だが、人形師の仕事部屋が見たい。なるべく奇怪な仕事部屋がいい。一つ変り者の人形師を教えてくださいかと云うと、先方は電話口で、エヘヘヘへと気味わるく笑った。

「あなたさまは、あの恐ろしい怪奇小説をお書きになる大江蘭堂先生でございますか。エヘヘヘヘ、それでしたら、ちようどおあつらえむきの老人の人形師がでございますよ。名人ですがね、そのアトリエには、だれもはいたったものがございません。秘密にしているのです。しかしね、先生、先生でしたら見せてくれますよ。伴天連爺さんは、いえね、これがその人形師のあだ名でございますが、その伴天連爺さんは、あなたさまが好きなのです。

あなたさまの小説の大的愛読者なのでございます。いつも、いちど先生にお目にかかって、お話がうかがいたいと申しております。先生のことなら、きっと喜んで、秘密のアトリエを見せてくれますよ」

ひどくお愛想のいい店員であつた。伴天連爺さんのアトリエは世田谷<sup>せたがや</sup>の経堂<sup>きやうどう</sup>にあるのだという。ぜひ、その爺さんに紹介してくれとたのむと、電話で、先方の都合を聞いて見ますから、しばらくお待ち下さいといつて、いちど電話を切つたが、間もなく返事が来た。

「先生、先方はよろこんでおります。今晚七時ごろに手がすくから、その頃おたずねくだされば、お待ちすると云つております。先生にくれぐれもよろしくと申しました」

そこで、大江蘭堂は、その晩、経堂の伴天連爺さんを訪問することにした。

経堂の駅で電車をおりて、教えられた道を十丁ほど行くと、街角に大きな石地蔵<sup>いしじぞう</sup>が立つていた。その向うは森になつていて、森のわきを歩いて行くと、生垣<sup>いけがき</sup>や堀<sup>へい</sup>ばかりの屋敷<sup>しきまち</sup>町で、ところどころに草の生えた空地<sup>あきち</sup>があつた。ボンヤリした街燈をたよりに、やつと目的の家にたどりついた。ガラスの割れた門燈が「日暮紋三<sup>ひぐれもんぞう</sup>」という表札を照らしていた。これが伴天連爺さんの本名なのである。

とびらもない門をはいつて行くと、草の中に古い木造の洋館が建っていた。

こちらの足音を聞きつけたのであろう。玄関のドアがひらいて、赤い光の中に小柄な老人のシルエツトが浮き出した。赤い光はチロチロ動いていた。老人は燭台しよくだいを自分のからだのうしろに持つて、こちらをじっと見ているらしかった。

「大江蘭堂先生でしような？　どうぞ、おはいり下さい。お待ちしておりました」

何かの鳥がさえずっているような、妙に若々しい声であった。

「わたしがバテレンじじいです。よくおいで下さった。さア、こちらへおはいりください」  
手をとらんばかりにして、廊下のドアをひらき、書斎らしい洋間しょうかんに請じ入れた。

部屋にも電燈はなかった。爺さんはあたりの様子を見せるように、太い蠟燭ろうそくの燭台をふりてらしてから、それを机の上に置いた。

書棚にえたいの知れぬ古本がならんでいた。壁には、レオナルド・ダ・ヴィンチの人体解剖図の大きな複製がベタベタ貼りつけてあった。村役場にあるような粗末な木机と木の椅子いす、蘭堂はその一つにかけさせられ、爺さんも向かいあって腰かけた。

これはすばらしい。これはもう、そのまま怪談の材料になる。蘭堂はホクホクしていた。爺さんも蘭堂に会えたのが、ひどく嬉しいらしく、

「よく来て下さった。なんでもお見せします。なんでもお話します。じゃが、その前に一ぱい如何いかですな。上等のコニヤックがあります」

そういつて、本棚の古本のあいだに入れてあつた、変な形の酒さか瓶びんとグラスを二つ持つて来て、酒をついだ。蘭堂がグラスを取つて、嗅かいで見ると、なるほどすばらしいコニヤックだ。チビリとやつて、爺さんの顔を見ていると、爺さんもチビリとやつて、ニヤニヤと笑つた。

「人形師の秘密がお知りになりたいのですな、小説にお書きになる？」

だんだん蠟燭の光が目慣れて来た。爺さんは、六十五六歳に見えた。黒いダブダブの洋服を着て、瘦やせて、顔におそろしく皺しわがあつた。目は澄んでいた。茶色の瞳ひとみだった。顔にも老年のシミが目立っていた。

「マネキン人形は鋸のこ屑くずと紙を型にはめて、そとがわにビニールを塗るのですか」

「そういうのもあります。いろいろありますよ。しかし、わたしは、ショーウィンドウのマネキンなんか造りません。そんなものは、弟子でしたちにやらせます。わたしは本職の人形師です。子供の時分に、安本亀八に弟子入りしたこともある。日本式の生いき人形にんぎょうですよ。桐きりの木に彫るのです。上から胡粉べいふんを塗つてみぐくのです。これは今でもやりますがね。し

かし、なんといつても蠟人形ろうにんぎょうですね。ロンドンのチュソー夫人の蠟人形館のあれです。わたしは今から二十年ほど前に、ロンドンへ行つて、あの人形を見て来ました。日本の生人形も名人が造つたやつは生きてますが、チュソー夫人の蠟人形と来たら、まるで人間ですね。生きているのですよ。死体人形なら、ほんとうに死んでいるのですよ。大江先生はロンドンへおいでになつたことは……？」

「ありません。しかし、チュソー夫人のことは本を読んで知つてますよ。僕もあの蠟人形は好きですね。皮膚ひふがすき通つて、血かが通かよっているようでしょう」

「そうです、そうです。血が通つています。死体人形なら、脈みやくがとまつたようです」

「で、あなたは、蠟人形を造つておられるのですか」

「そうです。今は蠟人形がおもです。医学校や博物館の生理模型ですよ。病気の模型が多いのです。だが、それはただ金儲かねもちけのためです。美術とは云えません。わたしは模型人形で暮らしを立てて、一方で美術人形の研究をしているのですよ。大江先生はむろんご承知でしょうが、ホフマンの『砂男』に出て来る美しい娘人形、オリンピア嬢でしたかね。あれがわたしの念願ですよ。おわかりでしょう。世の中の青年たちが真剣に恋をするような人形ですね」

伴天連爺さんは、なかなか物知りであった。ホフマンのナタニエル青年は、生きた娘よりも、人形のオリンピアに命がけの恋をしたのである。

「それでは、ジェローム・ケイ・ジェロームの『ダンス人形』をお読みにになったことがありますか」

蘭堂はつい誘いこまれて、西洋小説の話をはじめた。すると爺さんはニコニコして、

「読みましたとも、あれはわたしの一番好きな小説の一つですよ。娘たちのダンスの相手として、いつまで踊っても疲れない鉄の男人形を造ってやる人形師の名人の話でしょう。わたしはああいう名人になりたくて、修業したのですよ。あの鉄の人形も、生きて動き出したのですね。一人の娘を抱いたまま、無限に踊りつづけたのですね。実にいい話だ。ああいう小説を読むと、人形師の生き甲斐を感じますよ」

ジェロームの「ダンス人形」は訳が出ていないはずだから、この老人形師は外国語も読めるのであろう。あらためて書棚の古本を眺めると、英語でもフランス語でもドイツ語でもない背文字があった。蘭堂はなんだか気味がわるくなって来た。目の前の皺だらけの小さな老人が、奥底の知らない人物に感じられて来た。

「蠟人形はどうして造るのですか。やはり型にはめるのですか」

「粘土<sup>ねんど</sup>で原型を造ることもありますが、直接実物からとる場合もあります」

「実物からとは？」

「食堂のショーウィンドウに並んでいる蠟製の料理見本をごろんになったことがあるでしょう。あれは実物に石膏<sup>せっこう</sup>をぶっかけて、女型<sup>めがた</sup>をつくることが多いのですよ。そこへ蠟を流しこんで固め、彩色するのです。人間でも同じことです。ただ石膏がたくさんいるだけです」

「じゃあ、人間の肌に石膏をぬるのですね」

「そうです。ごろんなさい。ここに見本がありますよ。ホラ、これがわたしの手です。実物と見くらべてごろんなさい」

やっぱり本棚の古本のあいだから、ひらいた人間の手を取り出して、机の上においた。手首のところから切りとった手の平<sup>てひら</sup>である。老人形師は、自分の手をひらいて、それとならべて机の上にさし出した。小さな皺の一つ一つ、しなびた老人の手の色<sup>いろ</sup>合<sup>あい</sup>が、そのまま出ている。どちらが本物かわからないほどであった。

「これは、わたしの手に石膏をぬって、女型をとったのです。全身をとるのも、りくつは同じですよ」

「では、ほんとうの人間からとった全身人形も造ったことがあるのですね」

「ありますとも、画家がモデルを使うように、人形師もモデルを使うのです。モデルはドロドロの石膏にうずまるのですから、あまり気持がよくありませんがね。顔をとるときは、鼻の穴にゴム管を通して、息ができるようにしておくのです。たいていの娘はいやがりですが、なかには、石膏にとじこめられ、抱きしめられるような気持が好きだといって、進んでモデルになる娘もいますよ」

伴天連爺さんは、齒の抜けた口をあけて、ニヤニヤと笑った。

「そのアトリエを見せていたきたいものですね」

「むろん、お見せしますよ。では、これをすっかり飲んでから、アトリエへ行きましょう、今晚はうすら寒いですから、からだをあたたためてからね」

老人はそういつて、グラスを取りあげ、グツとのみほした。蘭堂もそれにならった。強い酒が腹にしみわたって、からだがほてってくるようであった。

老人は机の上の燭台を持って、先に立った。そのとき、蠟燭の光の加減で、机の上にほり出してある蠟製の手首が少し動いたように見えた。それから、まっ暗な廊下を三間げんほど行っただころで、老人は何かカチカチ云わせている。ポケットから取り出した鍵でドア

をあけようとしているのだ。

「このあいだ電燈会社と喧嘩けんかをしてしまいましたね、電燈がつかないのです。少々暗いが、我慢して下さい。もつとも、わたしは夜は仕事をしませんから、電燈がなくても、べつに差支さしつかえありませんがね」

弁解をしているうちに、ドアがひらくと、彼は燭台をヌツとこちらへさし出して、しばらく、じつと蘭堂の顔を見つめていた。

「びっくりしてはいけませんよ。なにしろ蠟人形というやつは、ちよつと気味のわるいものですからね」

警告するように云つて、部屋の中へはいって行つた。蘭堂は年甲斐もなく、少し怖こわくなつて来たが、それがまた、たまらない魅力でもあつた。彼はオズオズと老人のあとにつづいた。

## 妖美人

燭台の蠟燭が部屋の中をソロソロと動いて行つた。その光の中へ、何もない床ゆかや、粘土

のかたまりや、彫刻用のコテや、石膏のかけらや、いろいろのガラクタが、次々と現われ  
ては消えて行く。そして、ピッタリ光が動かなくなった。そこに異様な物体が横たわっ  
ていた。大きなものであった。

「これ、なんですか」

気味がわるくて、黙っていられなかった。

「よくごらんさない。死骸しがいですよ。断末魔だんまつまです。知死期ちしごです。わたしの自慢の作品です  
よ」

土色の男のからだであつた。目が血ばしつて赤く、唇くちびるがまっ青さおだった。頸くびから胸にかけ  
て、黒い血が凝固していた。頭にも胸にも腿ももにもほんとうの毛が植えてあつた。

「これもほんとうの人間から型を取つたのですか」

蘭堂は声が震えないように用心しなければならなかった。

「そうです。生きた人間からです。まさか死骸からではありませんよ」

伴天連爺さんは、そういつてから、フフと笑つた。

その次には、皮膚病の半身像や、変てこな局部像が、いろいろ並んでいた。並んでいる  
というよりは、ころがつていた。ひどく生き生きとして、今にも動き出しそうなものもある

った。

「このつぎに、面白いものがあります。蠟燭を消しますよ。でないと、感じが出ないので  
す」

フツと火が消えて、まっ黒なビロードに包まれた感じであつた。突然めくらになったように、まったく何も見えなかった。

「さア、両手を出して、さわつてごらんなさい。目で見てはちつとも美しくないけれども、手でさわれば、たまらない美しさです。わたしが考え出した類のない美術品です。ですから、夜をえらんだのですよ。先生にわざと夜来<sup>よる</sup>ていただいたのです。目で見ないで、手だけで見るといふのには、昼間はぐあいがわるいですからね。これは手で見るのですよ。つまり触覚の美術です」

蘭堂はいわれるままに、オズオズとそれにさわつて見た。冷たいなめらかな肌であつた。「もつと手をのばして、全体をなでまわしてごらんなさい」

だんだん手をのばして行くと、それは人間のからだに似たものであることがわかつた。しかし、普通の人間ではない。手が何本もある。足が何本もある。肉体の山と谷が無数にある。

はじめは薄気味がわるかった。不快でさえあった。だが、なでまわしているうちに、神經の底から妙な感じが湧き上がって来た。今まで一度も経験しなかった不思議な快感であった。そこには、想像し得るあらゆる美しい曲線が、微妙に組合わされていた。スベスベした、なだらかな運動感があった。手が自然にすべって行く、そのすべり方に、異様な快感があった。それは触覚だけでなく運動感覚にも訴える美しさであった。

老人は暗闇の中で、息の音も立ねてないで、小説家の感動を感じ取ろうとしていた。蘭堂の両の手が、はじめはゆるゆると、やがて、徐じょ々じょに速度を増して、ついには恐ろしい早さで、その物体の上を、這はいまわった。恍惚こうこつとして、時のたつのも忘れて、這いまわった。

「すばらしい。これはすばらしいですよ。ぼくはこんな美しいものに初めてさわりました。これは何という微妙な曲線でしょう。いったい、どんな法則から割り出した曲線でしょう。……」

闇の中から、老人のフフという笑い声がした。

「さつきから、もう三十分もたちましたよ。ずいぶんお気に入ったものですね。さア、つぎに移りましょう。もっとお見せするものがあるのです」

闇の中で手をとられて、その場を離れた。四五歩もあるくと、シユウとマッチがすられて、再び蠟燭が輝いた。いそいでうしろを見たが、さっきのふしぎな曲線の物体は見えなかった。老人は用心ぶかく、あの物体に覆いおおの布をかけてしまったのかも知れない。

「これですよ。この中ですよ」

燭台をかざしたのは、一つの大きな黒い箱の上であつた。それは西洋の装飾寝棺ねがんに似ていた。そと側の黒い色うろしが漆のように光つていた。

老人は燭台をおくと、またポケットから鍵束かぎたばを取り出して、その黒い長い箱の錠じようま前まえをはずした。そして、燭台をかざしながら、その蓋ふたをソロソロとひらいて行つた。

蠟燭の光といつしよに、目がチラチラした。箱の中には、白いなめらかなものが横たわつていた。蓋がすっかりひらいてしまうと、それは美しい裸体の女であることがわかつた。蘭堂は愕然がくぜんとして、一歩うしろにさがつた。蠟人形というものが、こんな恐ろしい美を持つているとは、思いもよらなかつた。ああ、これが生きた人間でなく蠟細工ざいくだなんて、そんなバカなことがあるものか。

「お気に入りでしたか。美しい女でしょう。これは生きていますのですよ」

老人はささやくような低い声で云つた。すると、その声が蠟人形に通じたように、美し

い瞼<sup>まぶた</sup>がブルブルとふるえて、パツと目をひらいた。蠟細工ではない、ほんとうの目であった。それがじつと蘭堂の顔を見つめていた。蘭堂の鼓動<sup>こどう</sup>が早くなつた。逃げ出したいような恐怖を感じた。

伴天連爺さんとはよくも名づけた。彼は伴天連の魔術を心得ているのであろうか。

「ハハハ、大江蘭堂さんは、こんなものに驚く方<sup>かた</sup>ではないと思いましたがね。あなた、顔が青くなっていますよ。ハハハハハ、わたしは天下の大江蘭堂をびっくりさせましたね。

先生のお書きになる怪談と、わたしの発明した怪談と、どっちが怖いでしょうかね」

爺さんは顔じゆうを、すぼめた提<sup>ちよう</sup>灯<sup>ちん</sup>のように皺だらけにして、齒の抜けた口を耳まで拡げて、悪魔のように笑っていた。

「これが蠟人形ですか。なにかカラクリ仕掛けでもあるのですか。ああ、目だけじゃない。唇が動いている。息をしている……」

「生きているでしょう。あなた、わたしのトリックにかかりましたね。これはほんとうに生きているですよ。人造人間じゃありません。さわってごらんなさい」

老人は無理に蘭堂の手を引っぱって、箱の中に横たわっている美女の肌にさわらせた。その肌は暖かくて弾力があつた。

すると、人形が、くすぐつたいと云うように、身もだえして、ムクムクと起き上がった。その時は、さすがの怪奇小説家も心臓が止まる思いをしたが、すぐに、それは老人形師の子供らしいトリックであることがわかった。箱づめになっていたのは、人形ではなく、ほんとうの生きた人間にすぎないことがわかった。

「ひどいいたずらをしますね。可哀そうにこのお嬢さんは、箱の中で、さぞ息ぐるしかつたことでしょう」

蘭堂はそう云いながら、美しい裸女はだしよの手をとって、引き起し、箱のそとへ出るのを手伝ってやった。

「ごめん、ごめん。これが怪奇小説家のあなたには、何よりのご馳走ちそうだと思ひましてね。実はこの女は、わたしのモデルなんですよ」

だが、ふしぎなことに、この美しいモデル娘は、少しも裸体をはにかむ様子がなかった。無言のまま、向うの衝突ついたての蔭かげにはいつて、しばらくすると、素肌の上にガウンを着たらしい様子で出て来た。

「先生、まだ心臓が静まりますまい。こういうときは一ぱいやるに限ります。この子こに酌しやくをさせて、あちらで又一ぱいやりましょう」

老人形師は燭台を持つて先に立ち、その次にガウンの美女、あとから蘭堂がつづいた。以前の書斎で、それぞれ椅子にかけると、またコニヤツクの酒盛りがはじまった。心がときめいているので、酒の廻りが早く、蘭堂はじきに酔い心地になった。

美女は殆んど口をきかなかった。何か云われると、ニツコリ笑つて頷いたり、かぶりを振ったりするばかりであつた。しかし、彼女も酒は少しずつ飲んだ。やがて目のふちがポーツと赤くなつて来た。

娘は人形から人間になつて、またもとの人形に戻つていくように感じられた。生きた人間にしては余りに美しすぎた。ホフマンのオリンピア嬢はこんな美しさだったかも知れない。若し生きているとすれば——いや、生きているにちがいないのだが——この皺くちやの老人が、どうしてこんな美しい女を手に入れたのか、ふしぎでたまらなかつた。

「このモデルの娘さんは、なんとおっしゃるのですか」

「最上令子と云います。これをモデルにして、寸分ちがわない美人人形を造りたいのです。いま、からだの調子を見ているのですよ。最良の状態のときに、石膏をぬりつけるのです」令子はパチツとまばたきをした。まるで自動人形のようなまばたきであつた。人間らしくなくて、人形とそっくりの娘。そこからこの世のものならぬ、あやしい美しさが発散し

た。人間らしくないところに、名<sup>めいじよう</sup>状しがたい強烈な魅力があった。

「令子さん、あなたは、自分とそっくりの人形ができるのを、怖いとは思いませんか」  
蘭堂ははじめて娘に話しかけた。

「いいえ」

彼女はかすかに微笑<sup>ほほえ</sup>んで、小さな声で答えた。人形が何かの仕掛けで口をきいているようであった。シャンとした姿勢で椅子にかけ、顔は正面を向いたまま、少しも動かさなかった。

蘭堂と老人形師とは、この美女をかたわらにして、一時間近く、コニヤックを傾けながら、人形の話をつづけた。

「それじゃ、令子さんをモデルにして仕事をはじめたら、知らせてください。ぜひ見たいのです。約束しましたよ」

恐ろしく酔って、ろれつが怪しくなっていた。そして、二人に見送られてそとに出たのだが、そのとき、玄関の戸口で、令子の手が蘭堂のからだにさわった。意味ありげにさわった。

彼は暗い町に出て、電車の駅の方へヨロヨロと歩きながら、その感触を思い出していた。

ふと、若しやと気づいたので、さわられた側のポケットに手を入れて見ると、小さな紙きれがはいっていた。街燈の下まで急いで、その紙きれを調べると、鉛筆で次のような走り書きがしてあった。

「この爺さんは大悪人です。助けて下さい。わたしは殺されます」

【附記】これも一挙掲載で、私の次の発展篇を角田喜久雄君、解決篇を山田風太郎君が執筆した。

## 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第17巻 化人幻戯」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年4月20日初版1刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第十六巻」春陽堂

1955（昭和30）年12月

初出：「講談倶楽部」講談社

1954（昭和29）年9月増刊

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：入江幹夫

校正：植松健伍

2019年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 悪霊物語

## 江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>